

第 1 号様式

令和 8 年度 第 1 回 保土ヶ谷区 障害者地域自立支援協議会 担当委会 議事録	
日 時	令和 8 年 6 月 4 日 (木) 14 : 00 ～ 16 : 30
開催場所	保土ヶ谷公会堂
出席者	<事務局>石田 (夢 2 1)、栢元・佐藤雄・芳垣 (保土ヶ谷区役所高齢・障害支援課)、平良 (保土ヶ谷区生活支援センター)、島田・早坂 (ほどがや希望の家)、戸村 (恵和)、村瀬 (保土ヶ谷区社協)、田中 (わおん相談支援事業所)、田村・遠藤 (保土ヶ谷区基幹) <各部会長 (担当者)> 金井 (ゆめわーく：自主製品販売)、竹内 (当事者活動支援)、山下 (ゆめのね：こども)、中戸川 (防災)、田中 (わおん相談支援事業所：相談) <拠点事業所> 武田 (保土ヶ谷介護事務所)、野口 (活動ホームゆめ)、相原 (相談)、福田・丸山 (たちちほどがや)、樋口 (のぼら園)、佐野 (恵和青年寮)
欠席者	三浦 (基幹) 雨宮 (精神 net) 菅田 (防災)、力石 (トラック)、前沢 (保土ヶ谷区生活支援センター)
開催形態	公開 (傍聴人： 名) ・ 非公開
議題	司会進行：基幹 議事録：恵和 ◇はじめに ・ 担当委会の役割：各部会の活動・運営状況の報告、および地域課題の抽出と議論の場。 ・ 自立支援協議会の目的：障害のある方が地域で安心して暮らせるよう、福祉の枠を超えて関係機関が共同して課題解決に取り組む。 ・ 本日のゴール：前年度の報告書を踏まえ、全体で共有・検討したい課題について意見交換を行い、今後の部会計画や拠点整備計画の方向性をすり合わせる「道しるべ」とする。 1:ほっとな街づくり(地域福祉保健計画)と自立支援協議会の連動 報告者：社会福祉協議会 村瀬氏 / 自立支援協議会 石田氏 ・ 地域福祉保健計画(ホットな街づくり 第 5 期計画)の概要： ○ 障害者プラン等の分野別計画を包含し、地域全体での啓発や横断的な取り組みを定めた計画。 ○ 基本理念に基づく 3 つのテーマ：①見守り支え合い、②生き生き健康、③担い手づくり・情報。 ・ 自立支援協議会・各事業所との関わり(冊子からの抜粋)： ○ 15 ページ：地域ネットワークを持つ団体との情報共有・つながり作り(協議会への期待)。 ○ 17 ページ：困りごとを抱える人への生活支援。 ○ 25 ページ：自分らしく過ごせる居場所づくり(生活支援センターの取り組み等)。 ○ 33 ページ：障害者施設による自主製品販売を通じた、地域活動への参加と活躍。

● 今後の連携に向けたコメント(石田代表より)：

- 計画内に障害福祉の視点を少しでも反映させていく。
- 地域住民(推進委員)から「障害者が何に困っているか見えにくい」「地域のイベントに出てきてほしい」との声があるため、無理のない範囲で地域イベントへ参加し、顔の見える関係を作っていく。
- 「困った時は自立支援協議会に相談すればよい」と思われる存在を目指す。

2:各部会からの報告(地域で共有・検討したい課題と取り組み)

部会名	共有・検討したい課題	シェアしたい取り組み・その他
精神 ネット	・全体会が個別事業所の課題に終始しがちで、区全体で取り組むべきテーマかの見極めが難しい。 ・地域への理解啓発を「障害側からの一方通行のお願い」にしない工夫が必要。	・精神科病院からの地域移行推進、医療機関との連携強化。 ・アウトリーチ事業のパンフレットを今後配布予定。 ・「にも包括」の視点を地域福祉計画と連動させ、市・区全体から「みんなで考えるのが普通」というメッセージを発信してほしい。
ほっと らんど	・資金不足により、設備等の維持・更新が難しい。	・自主製品(お茶等)の価格改定(150 円へ)により、状況が改善傾向。 ・各事業所の協力による回転率の向上。資金確保への協力を要請。
こども 部会	・障害児相談支援のリソース不足による「望まないセルフプラン」の常態化(本人の意思決定支援の困難さ、養育者都合への偏り)。 ・緊急一時保護で入所施設につないだ際、元の学校への通学手段が物理的・人為的に確保できず、学びの機会が失われる点。	・児童期から成人期への移行(ライフステージに応じた相談先・サービス活用)に関する周知取り組みの検討。

	自主 製品 販売 部会	・3 事業所が増加したため、これまで以上に関係機関との密な情報交換が必要。	・イオンや区役所での定期販売に加え、新たな販売機会（開拓）のアンテナを張る。 ・販売時に他部会のチラシ配りやアナウンスを積極的に引き受け、連携を強化する。
	相談 部会	・年間 1 人体制の事業所が多く、部会に参加できない、訪問対応に限界がある等の理由で、継続的なフォローが困難。 ・区内の計画相談の決定数が増加しない構造的課題。 ・地域課題抽出のレベル感・温度差にバラつきがあり、テーマがぼやけてしまう。	・令和 8 年度目標：地域課題を抽出できる人材の育成。
	防災 部会	・資機材（備品等）は購入できたが、今後の使い方や実際の災害発生時の行動規約・連携体制の整備（シミュレーション）が課題。	・チラシ配布について、社協や区役所、各イベント等での協力可能性を確認したい。 ・支援学校の保護者へのアプローチ方法について、今年度防災部会に参画予定のメンバーと相談予定。
	まちで 暮ら す部 会	・分野横断的な連携（特に児童期から成人期への移行期における課題）が非常に大きい。 ・緊急時の受け入れ体制整備。	・こども部会とのコラボ企画（検討会、短期入所の意見交換等）。 ・強度行動障害のある方のシェアを考えるワーキンググループ（WG）での話し合い（今年度はよりオープンに実践的支援や人材育成を進める）。
	当事 者部 会	・実質的なメンバー不足。 ・活動の具体策や知名度の不足。	・今後の部会のあり方について、1 年かけて話し合いを重ねていく。

		・上映会等のイベント実施において、区制 100 周年に絡めた予算確保が難しかったこと、障害種別による啓発方法の違いの難しさ。	
	全体会・担当者会	・各部会での事例検討から、マクロな地域課題を吸い上げる仕組みが十分に機能していない。 ・致命的な人材・担い手不足：事務局の担い手不足。参画による繋がり等のメリットはあるが、経営面（人手を割く負担、収入に直結しない点）から現状の協力体制維持は困難。	・課題解決のため、5 月より拠点事業所や新規定着推進事業所、主任相談支援専門員による「3 機関連携会議（年 3 回予定）」を開始。横串を通す仕組みを目指す。 ・【提案】協議会に積極貢献する事業所に対し、加算設定、報酬上の評価、市独自の支援策などの優遇・評価仕組みの検討が必要。
	代表・事務局会議	・区制 100 周年関連の団体登録は行ったが、補助金等の受給が難しく、継続的な活動への道筋が立っていない。 ・区内だけの取り組みでは、参画メンバーへの労力・負担が重すぎる。	・区を超えたエリア広域での検討・陳情の必要性：ガイドヘルパーの拡充（入所施設での利用等、8 月からの市方針等の動きあり）、送迎ドライバー不足への対応、緊急時ショートステイの輪番制や人員配置の柔軟化などを市に訴えていく。
	・ 各部会：本日共有された「ホットな街づくり（地域福祉保健計画）」の視点を念頭に置き、日頃の業務や部会活動との連動を意識する。 ・ 防災部会：チラシ配布協力（社協・区役所等）の打診、支援学校保護者へのアプローチについて担当メンバーと具体策を協議。 ・ 事務局（遠藤氏他）：開始された「3 機関連携会議」を通じて、部会間の横串を通す課題抽出の仕組み化を進める。事業所への評価・加算等の仕組み検討。 ・ 全体：次のプログラムである「グループワーク」へ移行。		

3：グループワーク

部会：「市域で検討・共有したい課題」

司会：石田氏 / 記録：吉垣氏 / 発表：田村氏 各部会から出された地域課題について、それぞれの立場（障害福祉、行政、家族会、児童等）から多角的な視点で意見交換が行われました。

(1) 移動支援・入所施設のガイドヘルパー利用と担い手不足

- **入所施設のガイド利用緩和(8月～)：**＊ 地域移行を前提としたチーム支援の中で合意された場合、例外的に月5時間の利用申請が可能となる。最長1年間。
 - **課題感：**強度行動障害等の重度障害に対応できるヘルパー事業所が限界を迎えており、最近も大手事業所の廃止が続いている。制度が認められても「派遣できるヘルパーがいない」という致命的なミスマッチが懸念される。
 - **構造的課題：**ガイドヘルパーは「利用者と向き合っている時間」しか報酬が発生せず、移動にかかる人件費が出ないため、事業所の赤字負担に頼っている現状がある（市・国への仕組み改善要望の必要性）。

(2) 地域住民との顔の見える関係づくりと「ケアプラザ」の役割

- **地域へ入っていくアプローチ：**
 - 過去の地域連携の成功例として、ケアプラザの職員が地域の小さなお祭りから町内会の準備まで一緒に汗を流し、まずは「顔を繋ぐ（関係性を作る）」ことで、後から福祉の相談が自然と引き出されるサイクルがあった。
 - **マンパワーの差：**区内に8カ所あるケアプラザ（地域ケアプラザ）と違い、障害分野の基幹相談支援センターは区内に2カ所しかなく、同様のきめ細かい地域対応を全域で行うにはマンパワーが圧倒的に不足している。
 - **今後の方向性：**障害福祉側が単独で地域にアプローチするのではなく、すでに地域に根づいているケアプラザのネットワーク（コーディネーター会議、地元の学校のボランティア受け入れ等）に便乗・連携させてもらう形が現実的である。

(3) 当事者の孤立防止と「安心して過ごせる居場所」のあり方

- **当事者の不安：**＊ 一人暮らしの精神障害の当事者からは、地域に参加できるコミュニティやネットワークがなく、病気への理解者が周囲にどれだけいるか強い不安があるとの声が出た。
- **居場所づくりのヒント：**
 - ただ椅子があるだけの場所でも、そこに行けば「誰かに会える、繋がれる」というハード（場所）の存在自体が重要。
 - 他区のケアプラザが実施している「ひきこもりカフェ」の事例では、参加者同士が批判し合わない明確なルールを設けつつ、当事者のピアスタッフや職員が緩やかに介入することで、声の大きい人だけが主導しない「誰もが安心して話せる・いられる場」を担保している。
 - ※家族会においても、繋がれているのは全体の15～20%程度であり、大半の繋がれていない在宅障害者・家族をどう見つけるかが共通の課題である。

(4) 相談支援における「共同体」の取り組みと児童・成人の縦割り解消

- **望まないセルフプランの解消に向けて:**

- 区内では、得意分野の異なる4つの計画相談事業所が集まり、週1回のケース共有と月1回の事例検討を行っている。
- この共同体を糸口に、お互いの強みを活かしてケースを融通・サポートし合うことで、相談支援全体の質を上げ、セルフプランを減らしていく。

- **世代間(児童期～成人期)の分断:**

- 児童期と成人期で支援が分断されがちだが、ライフステージを横断して長く関われるのは「計画相談」であるため、ここがハブとなって縦割りを解消していく可能性がある。
- 「就学前の集団生活体験のための期間限定の送迎支援(お出迎え・お届け)」のように、家族への後押しや、福祉に繋ぐ初期の「きっかけづくり」が非常に重要となる。

(5) 自主製品販売部会における「事業者間の意識・目的のズレ」

- **課題の顕在化:**

- 新規事業所が増えたことで、「販売活動を通じて他事業所と交流し、部会としての一体感を高めたい(古い事業所)」という思いと、「リソースに余裕がなく、自所の製品を売ることで手一杯(新規・一部事業所)」というスタンスの温度差が浮き彫りになった。
- 製品の搬入時間や、準備・片付けの負担が特定の事業所に偏ることで不満が生じている。

- **対策と今後の方向性:**

- 強制はできないが、「月1回の実行委員会には出る」「2回に1回は参加する」などの最低限のルールを明文化し、線引きをしていく必要がある。
- 普段の駅や区役所での合同販売時、休憩中に「ちょっと隣のブースを見ておいて」と言い合えるような良好な横の繋がりが(プラットフォーム)は長年の積み重ねでできつつあるため、焦らず対話を重ねてボトムアップしていく。

拠点:「緊急の場について」

司会:遠藤氏 / 記録・発表:杉元氏

1. 全体目標・基本方針(「メディア(12).jpg」より)

- 緊急時対応の取り組み・課題:住まいの確保が可能な状態を目指す。
- 想定されるケース:毎日宿泊する体制は厳しい。緊急受け入れの枠を作っておくとあらかじめ決めておく必要がある。
- 運営・人員の課題:経営面、人手不足。専門の人材確保・育成。
- 対応の迅速化:想定ユーザーデータの「緊急になりうるリストアップ」を行い、迅速につなげられるようにする。

2. 各種サービス・施設ごとの課題と現状(「メディア(12).jpg」より)

① 短期入所(ショートステイ)

- 通常利用で埋まっており、ニーズが多い(枠をあけておくと経営が苦しくなる)。
- 重複・強行的な利用の中で、緊急受け入れができるか?定数を超えると給付が出ない。

② 緊急を要する「人・場所」の対応

- 事業所だけでは対応が難しい。体制や外部の多職種との連携が必要。

③ 入所施設 → 病床

- 平日の宿泊において、緊急対応する余力があるか？（人はいない）。
- 「人だけ追う」事業所だからこそ、人員配置のカバーや保証書、連帯保証の課題がある。希望の就風（※就労環境・風土等の意と思われる）がない。

④ GH（グループホーム）空きがある（市内）

- 相性があるため、短期利用は難しい。
- 安定（家賃補助金など）がなくなったので減るかも。

⑤ 建物間の貸し出し

- 内内でショートステイ、緊急、体験利用できる3つを回す。
- 輪番で緊急枠の確保などはどうか。
- 緊急を緊急のままにしない。ハイリスク → リスクを減らしておく「予防的取り組み」。

⑥ 在宅切り替え時の課題

- 在宅復帰の環境整備が必要。
- 緊急時の緊急在宅サービス（必要性）。とりあえず在宅で受け入れるなど。
- 設備の活用、病院との連携。
- 2ヶ月使用できない。医師からの指導。なるべく入院せずに……。

3. 緊急アセスメントとリスク評価（「メディア（13）.jpg」より）

① 家族からの SOS と現状把握

- 立ち止まって「本当に本人は過ごせないのか？」を考える。
- 計画相談で家族の状況を含めたアセスメントを行う。
- 万が一のことが起こったらどうするかを把握しておく（フローチャートの作成など）。

② 緊急対応のための手段

- 緊急対応を行うための「短期 → 在宅、ショートステイ」の連携。

③ 予後・リスクの総合評価（基幹検討中）

- 自宅での体験事業において、以下のリスクを想定し、1番高いところを選定する。
 - 本人リスク
 - 家族リスク
 - 支援体制リスク
- 基幹（基幹相談支援センター等）でリスト可を検討中。

4：グループワーク共有

【グループ1：部会グループの発表】

多様な立場（支援者・当事者・家族会）での意見交換を踏まえ、以下の点が共有された。

- 「繋がり」の再評価と当事者視点の場づくり：
 - 多くのネットワークはあるが、まだまだ改善・深化できる余地がある。
 - 当事者の「自分の身近な生活圏で安心して話せる場、理解者がほしい」という声は重要。これは自然発生するものではないため、他地域の手法も参考にしながら、行政や協議会が意図的に「仕掛けていく場づくり」が必要である。

- **支援者のスタンス(背中を押す支援):**
 - 本人の意思を無理に引っ張るのではなく、迷っている「背中をそっと押す」スタンスが大切。
 - 何でも先回りして支援(お膳立て)しすぎると、本人が自立して動く可能性や機会を逆に奪ってしまう懸念がある。
- **計画相談の共同体と移行期の連携:**
 - 得意分野の異なる4つの計画相談による複合的な課題に対して複数事業所が協力し合う体制が有効。
 - 児童期から成人期、また高齢期への移行(ライフステージの転換期)における制度の段差を埋めるため、部会間(こども部会×まちで暮らすネットワークなど)の連携をさらに強めていく。
- **地域ネットワークへのアプローチ:**
 - 基幹相談センターと生活支援センターの2箇所だけで区内全域をカバーするのは困難。
 - ケアプラザが長年培ってきた地道なコーディネート機能や、既存の町内会ネットワークに「自分たちが入り込んでいく」アプローチを重視する。
- **自主製品販売部会の急成長に伴う課題:**
 - 規模拡大に伴い、「共同してやる意義や波長を合わせること」が難しくなっている。改めて「何のために集まったのか」の原点・目的を共有し、ネットワークを再構築していく。

【グループ2:拠点グループの発表】

児童相談所等から突発的な緊急ケース(短期入所要請など)が上がってくる現状への対応策について議論された。

- **緊急受け入れの現状と課題:**
 - 短期入所(ショートステイ)は通常利用で常に満床状態。緊急用に空床を確保することは事業所経営を圧迫するため困難。
 - 空きがあったとしても、重度障害や相性の問題、施設内でのトラブル懸念など、単独の事業所だけで受け入れるには限界がある。
 - **対策アイデア:** 複数事業所で連携体制を組む、または多職種連携でカバーする仕組みが必要。
- **各事業所のハード・ノウハウの融通:**
 - 例えば「ゆめ」や「希望の家」等では、宿泊機能はあるが夜間スタッフの常駐体制がない、またはお風呂がない等のハード面の制約がある。
 - グループホームの空き部屋の活用や、「建物の貸し出し(お風呂のみ外部利用など)」といった事業所間の工夫・連携の余地を詰めていく。ただし、トラブル発生時の責任の所在など仕組みの整理が必要。
 - 経営を圧迫しない形での「緊急枠の確保(市からの補填など)」といった制度的制限の緩和を求めている。
- **「緊急事態」を発生させない予防的取り組み(リスク管理):**
 - 短期入所だけに頼るのではなく、緊急時の「在宅サービス」のバックアップ体制を整える。

- 事前に計画相談において、家族の状況を含めたアセスメントを詳細に取り、「万が一の事態が起きたらどうするか」のプラン(事前シート等)を整理・把握しておく予防策が重要。
- 本人・家族・支援体制の総合的なリスクから「将来的にハイリスクになる可能性のあるケース」をリストアップし、拠点コーディネーターと迅速に連携して予防的支援に動く体制を作る。

【事務局・代表総括(石田代表より)】

- 両グループの発表からも分かる通り、もはや「1つの事業所だけで課題を抱え込むのは不可能な時代」になっている。
- 自立支援協議会や3機関連携会議などのネットワークを最大限活用し、地域全体で受け止める体制(仕組み)を構築していく。
- 議論だけに終わらせず、今日をきっかけに「ここ(他の事業所)と一緒に実際に動いてみよう」という具体的なアクションに繋げていきたい。

5: 自立協ホームページの件

報告者: ホームページ世話人 田村氏(保土ヶ谷区基幹相談支援センター)

リニューアル3年目を迎え、アクセスや認知度が向上しているホームページおよびInstagramについて、今年度の運用方法の見直しと協力体制の確認が行われた。

(1) 各ツールの運用方針

- **Instagram(インスタグラム)の重要性:**
 - 外部(一般層など)からのアクセスにおいて「インスタを見てからホームページへ流入する」流れが主流となっているため、非常に重要なツールと位置づけている(フォロワー等も順調に増加中)。
 - **今年度からの変更点:** これまではコラム等の連動のみだったが、今年度からは**各部会が直接Instagramへ投稿できる運用に変更する**(イベント案内やポスター、チラシ等の積極的なアップを推奨)。
- **活動コラムの継続(目標: 年1本以上):**
 - ホームページ内で最も閲覧数が多いコンテンツ。各部会の活動、研修の様子などを文章・写真・画像データ等でまとめた読み物。
 - 前年度は23本のコラムが掲載された(月2本ペース)。今年度も各部会のご協力のもと、掲載スケジュールの年間予定(資料裏面参照)を調整済み。
- **議事録・資料のデータベース化:**
 - 各部会の議事録や研修資料を蓄積。本日の担当者会議の議事録も、完成次第掲載し、メール配信される。過去の資料を確認するデータベースとして活用してほしい。

(2) 作業効率化・掲載ルールの変更点

- **週末一括更新への変更(コスト・効率化のため):**

- 今年度より、各部会から集まった記事や議事録は事務局側で一旦集約し、**毎週金曜日に管理者(桜井氏)へ依頼、週末に一括更新(掲載)する運用とする。**

- **各部会へのお願い(掲載内容のセルフチェック):**

- 掲載後、世話人(田村氏、三文字氏)側でも必ず確認を行うが、部会ごとの詳細な背景(例:古いバージョンの議事録を誤って載せていないか等)までは判断しきれない場合がある。
- **掲載が確認されたら、各部会の担当者が一度内容をチェックし、修正があれば世話人まで連絡してほしい。**

- **議事録提出の期限:**

- 記憶が鮮明なうちに掲載するため、また掲載忘れを防ぐため、「部会開催月の翌月末まで」に議事録(次第)のアップ依頼を世話人まで送ること。
- 提出が滞りそうな場合は、世話人からリマインドメールを送付する。

(3) 連絡窓口・スケジュール調整について

- **問い合わせ窓口の統一:**

- 管理・デザインを担当している桜井氏は外部のフリーデザイナーであり、自身の創作活動も並行しているため、各部会から直接細かな質問をするのは避けること。
- 「まずは世話人(田村氏、または生活支援センター・三文字氏)へ連絡」を徹底。世話人側で回答できるものは対応し、判断が難しい内容をまとめて管理者に確認するルートとする。

- **掲載月(スケジュール)の変更:**

- 閲覧者の興味を引くため、掲載月が特定の時期に偏らないよう均等に配置している(資料裏面の予定表参照)。
- 当初の予定月からの変更や、掲載内容の差し替えを希望する場合は、事前に必ず世話人まで一報を入れること。

- **トップページ「お知らせ欄」の活用:**

- 部会外や外部の広範なメンバーを募りたい研修・イベントがある場合は、トップページのお知らせ欄で案内・募集が可能なため、事前に世話人まで相談・調整すること。

7. その他

特記なし

次回担当者会議：11月11日(水) 14:00～16:30

場所：保土ケ谷区役所地下会議室

緊急時対応の取組と課題

1. 住まいの確保と生活機能の維持について

緊急時の対応 避難所、人手不足

計画相談センターなどによる対応

専門人材の確保、育成

拠点づくり、ネットワーク、緊急時の対応、避難所、避難所、避難所

避難所、避難所、避難所

避難所、避難所、避難所

避難所、避難所、避難所

避難所、避難所、避難所

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時の対応 人、場所、物資、情報、資金、物資、情報、資金、物資、情報、資金

緊急時

避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保

避難所の確保、避難所の確保、避難所の確保